

議事録（要点筆記）

会議名	平成25年度 野村胡堂・あらえびす記念館運営審議会					
開催日時	平成25年6月15日（土）午後3時30分～午後5時30分					
開催場所	野村胡堂・あらえびす記念館ホール					
審議会次第	1 辞令交付（江藤秀一氏・杉本勉氏） 2 開会 3 町長挨拶 4 報告 平成24年度事業報告について 5 協議 (1) 平成25年度事業方針及び事業計画について (2) 胡堂没後50年記念館図録出版について (3) 開館20周年事業（平成26年度）について 6 その他 7 閉会					
運営委員出欠状況	会長	澤口たまみ	出	委員	住川碧	出
	委員	太田愛人	出	委員	山際正之	出
	委員	鈴木文彦	出	委員	江藤秀一	出
	委員	杉本勉	出			
行政	町長 藤原孝			教育長 侘美淳 ※欠席		
	教育部長 小田中健 ※欠席			生涯学習課長 高橋正		
	学習推進室長 谷地和也			野村胡堂・あらえびす記念館長 野村晴一		
	野村胡堂・あらえびす記念館 主査 高田美保					

審議会の記録（要点筆記）

議事に先立ち、町長より江藤秀一氏及び杉本勉氏に辞令書を交付する。

開会（事務局）

町長あいさつ

新しく当館運営審議会委員をお願いすることになった江藤氏と杉本氏には、ご協力、ご指導賜りますようお願いいたします。

今年度は、胡堂没後 50 年の年であり、先般地元中心に偲ぶ会を開催することができ、開催にあたっては、運営審議委員の方々にもご尽力いただき、無事盛会裡に終えることができた。

また、議題の中にもある没後 50 年記念館図録（仮称）出版を予定しているが、お忙しい中、鈴木委員にいろいろご尽力いただいていることに感謝申しあげる。後世に残す資料として充実したものを出版したいと考えている。

今年は没後 50 年そして来年は、開館 20 周年を迎える。記念することの方向性を出しながら、更に充実した野村胡堂・あらえびす記念館にしていきたい。

3 月に岡堂氏から新たに SP レコードを寄贈していただいた。前回いただいたレコード同様、大変貴重なものをいただいたと思っている。

貴重な資料を後世にどう残していくか等、図録出版、開館 20 周年と併せて各委員にご指導をいただきながら進めていきたい。

〈事務局〉 この後の進行については、野村胡堂・あらえびす記念館条例施行規則第 13 条第 2 項により澤口会長へお願いします。

平成 24 年度事業報告について

〈会 長〉 スムーズな進行に努めたい。事務局より平成 24 年度事業報告について報告を願う。

〈事務局〉 記念館及び記念館協力会の平成 24 年度実施事業を説明。

〈委 員〉 ガイド養成講座とは、どういった内容のものなのか。

〈事務局〉 記念館の展示等を説明していただくボランティアを養成する講座であり、3 年前から実施している事業になる。

〈会 長〉 ボランティアが説明した実績はあるのか。

〈事務局〉 まだ実績はない。

〈委 員〉 ガイドとして対応できる見通しはついているのか。

〈事務局〉 毎年度、参加する方が違うため見通しをつけるのはなかなか難しいが、年度毎、毎回同じ方が参加できるとすれば 2～3 年で対応できると考える。

〈委 員〉 ガイドマニュアルは作成しているのか。

〈事務局〉 まだ作成には至っていない。

〈委 員〉 講師はどなたをお願いしているのか。

〈事務局〉 野村館長をお願いしている。

- 〈館長〉 表面的なものだけでなく、実際生家にも足を運んでいただき、胡堂が幼少時に生活した所を見る等、講座でしか体験できない、具体的なことも勉強していただいている。今後生かせる場をつくっていききたい。
- 〈委員〉 「胡堂」、「あらえびす」とジャンルを分けたボランティアを養成し、ボランティアのリストを作っていくことが必要である。
- 〈会長〉 今まで全体的なガイドボランティア養成の内容だったが、「あらえびす」、「胡堂」胡堂が蒐集した浮世絵等、ジャンル別にすることでボランティアの関わり方が変わってくるのではないかという大変貴重なご意見をいただいた。
- 〈委員〉 ジャンル別のガイドだと高度な知識が要求される。紫波町内だけでなく、通える範囲で町外にも呼びかけをしていく必要がある。
- 〈委員〉 紫波町内で開業医をしている知人は、音楽分野に詳しい。声をかければ喜んで引き受けてくれると思う。
- 〈委員〉 レコードコンサートが毎月開催され年間405名の方が来場されているが、来場者の年齢層を教えてください。
- 〈事務局〉 60代より上の年齢層が主である。
- 〈委員〉 今の若い年代は、CDの音でしか聴いたことがなくレコードを見たことがないと思う。若い世代へのコンサート開催の広報活動をどのようにしているのか。
- 〈事務局〉 HPの広報のみである。
- 〈委員〉 岡堂コレクションの中にはおもしろい（貴重な）ものがあると思うが、世間にあまり知られていないのが現状である。岡堂コレクションのリストを音楽の友社に送る等して周知したほうがよい。そういった取り組みを20周年記念事業、今後考えていく必要がある。
- 〈会長〉 今後の事業について話が出てきているので、事務局から平成25年度事業計画の説明をお願いします。

平成25年度事業方針及び事業計画について

- 〈事務局〉 平成25年度事業方針、事業計画及び実施事業について説明。
- 〈委員〉 フランコ・マウリッリさんを講師にしたレコードコンサートを以前聴いたが、大変素晴らしかった。フランコ氏にどんどん講師を依頼してレコードコンサート等を開催して行ってほしい。また、記録してほしい。
- 〈委員〉 目標として入館者数を前年度比較でプラスにするとしているが、貴重な資料を収蔵していること等を世に知らしめていかなければならない。何か取り組みは考えているのか。
- 〈事務局〉 今年の4月にホームページをリニューアルしている。その中に記念館で収蔵している資料をリストにし、公開していきたい。また、若い年代層の来場につながる事業等を開催していかなければならないと考えている。

- 〈事務局〉 今年夏のあらえびすレコードコンサートを夜に開催する予定である。また、クラシック以外のジャンル（ジャズ、ロック等）のLPも寄贈していただいているので今後活用し、幅広い年代の方々が来場することにつなげたい。
- 〈委員〉 クラシックにこだわらず若い年代層が興味を持つ事業を実施していただくことも必要と感じる。また、素晴らしい庭があるのだから、庭も活用した事業を検討してはどうか。
- 〈委員〉 先ほどロックのレコードについて話がでたが、CDでは飽き足らず、レコードからロックを聴く若い人たちが増えているという話を聞いた。レコード盤でロックを聴くというのが若い人たちに浸透してきているのであれば、記念館で聴く機会をつくることを考えてみてはどうか。
- 〈委員〉 今、クラシックだけで運営していくのが難しいことは世界共通になってきている。
- 〈町長〉 オガールプラザの中に音楽スタジオが2箇所あり貸出しているが、土日は予約でいっぱいになる。利用している団体が約100、半分が町外の団体で利用者年代は、主に若い年代と中年層である。オガールプラザと記念館がタイアップしていけばどちらも利用者が増えるのではないか。
- 〈委員〉 ホール利用につなげることで間接的に入館者増につながるのではないかと思う。
- 〈会長〉 入館者数については、館等で主催する事業だけでなく、貸しホールの実績も入館者数に反映される。若い世代がここでコンサートを行えば、友人等が見にくることで入館者等の増員につながる。
記念館ホールでコンサートができることを周知することが貸しホール事業＝入館者等の増員につながるというご意見を皆様からいただいた。
- 〈町長〉 記念館、オガールが連携して活用する方法を考えなければならない。練習に来ている人たちは、見せ場がほしいと思っている。その場として記念館ホールを提供できることを周知していくことが必要である。早々に情報交流館と相談しながら進めていってほしい。
- 〈委員〉 ジャンルを問わずホールの貸出をしていかなければならない。オガールを利用している人たちにとって、記念館ホールの利用は敷居が高いと思っているかもしれない。敷居が高くないことの周知が必要である。
- 〈会長〉 その他、違った方面・切り口からのご意見はないか。
- 〈委員〉 私たちの世代であれば野村胡堂、銭形平次と聞けばどういったものかがわかるが、現在は、銭形平次がテレビ放映されていないため、小さい子たち（若い世代）は、知らないと思う。小学校の授業等の中で記念館を見学することは行っているのか。
- 〈事務局〉 町内には11校の小学校がある、ほぼ全校（3～4年生）が社会見学の一環として毎年見学に来ている。

- 〈委員〉 自分が小さいころは、授業の一環として、また夏は外で映画鑑賞会を大人の人たちが集まって行ってくれた記憶がある。
展示しているものを見学し、勉強していくことはよくあるパターンではあるが、例えば銭形平次の映画を娯楽等含めながら記念館で観て、こういったおもしろい作品を作ったのが紫波町出身の野村胡堂ということ、記念館があることを小さいときに知れば、成長するごとにホールでバンドの練習ができる、クラシックを聴ける等、いろいろな形で記念館への来館、利用につながるのではないかと思う。
- 〈会長〉 小さい時から年齢に応じて記念館へ出入りできる仕組み、イベントが必要であるというご意見をいただいた。
- 〈委員〉 学校の現場では、どちらか一方通行の貢献ではなくお互いWIN・WINになる考えが教育現場に入りつつある。
例えば、フェイスブックをコンピューター会社と提携することで宣伝の効果、授業で取り入れることでお互いがWIN・WINになるという仕組みである。
先ほど出た話の中でオガールとの連携はこの仕組みであり、お互いに利益が出てお互いに高め合うことにつながると思う。そういったことを進めることがこれからの記念館のあり方として模索する価値はあるのではないか。
昔は、外で風にゆれるスクリーンで映画を観た。そういったものに子どもは興味を持つ。夏の子ども会と一緒にこの広場を映画会の会場として活用してもらおうよう、子ども会に紹介していく。そういった活動をこまめにしていくことが、小さな子たちに地元文化を大事にしていくことにつながると思う。
- 〈委員〉 小学校上級生、中学校の遠足コースの終点を記念館にし、芝生で休憩、SPレコード、CDを鑑賞するという取組を入れてみてはどうか。
胡堂は通学のために日詰駅まで歩いた。昔胡堂が歩いたコースを辿ることは、大きく言えば10年後、20年後記憶に残るのではないか。
- 〈委員〉 盛岡市の事例だが、岩手県立美術館エリアには、遺跡の学び館、子ども科学館、先人記念館等があり、駐車場、遊ぶ芝生が整備されている。遠足の休憩所、土日は家族連れでにぎわっており、多目的に利用されており、美術館に興味がない人が美術館を訪れる等、うまく相乗効果が出ている。
遠足コースの取り組みは、これと同じくとてもよい案だと思う。こんな素晴らしい場所を活躍させる方法はたくさんあると思う。

胡堂没後50周年記念館図録出版について

〈会長〉 事務局から説明をお願いします。

〈事務局〉 経緯も含め、資料『野村胡堂あらえびす読本』（仮題）を基に説明。

胡堂が町に寄附した200万円を基に昭和39年につくられた「野村胡堂文庫基金」により購入した蔵書は、平成23年度までに約1万9千冊（胡堂文庫）になっている。

昨年度、町の図書館が開館したことにより胡堂文庫は役目を終え、蔵書は図書館に引き継いでおり、基金250万円が残った。

その250万円の活用方法を考えたときに昨年度の運営審議会が出た「野村胡堂とあらえびす」の足跡をもう一度見直すというご意見を基に高橋克彦氏（以下「克彦氏」）に本を書いてもらうという提案があった。

事務局サイドでは、作家というところを踏まえながら何かできないかということを検討してきた。

昨年、NPO法人野村胡堂・あらえびす記念館協力会の3役会において250万円を基

に顕彰事業ができないか相談したところ本の出版についてご意見をいただいた。

これらの経緯を基に検討した結果が1冊で丸ごと野村胡堂・あらえびすがわかる図録出版の企画である。図書出版の費用については、「野村胡堂文庫基金」を「顕彰事業基金」に切り替え予算250万円を確保している。

図書出版すると言っても事務局は素人のため、澤口会長や鈴木委員にご協力をいただきながら、野村胡堂・あらえびすの足跡が1冊でわかる本を作りたいということで克彦氏の秘書をされている脚本家の道又力氏（以下「道又氏」）に内容を構成して

いただいた。そういった中で現在は出版社をどこにするか、中身をどうするか等を検討中のところである。

今年没後50年、来年開館20周年を迎える間のところで出版ができればと考えている。

<会長> 名誉館長である克彦氏に町で野村胡堂に関する本をつくる意向があることを伝えたところ、「これ1冊で野村胡堂がこんな人だったということがわかる顕彰本にしたい」との提案があり、こういった形の構成になっている。

出版社については、鈴木委員にご協力をいただき進めているところであり、鈴木委員からも補足、説明をお願いしたい。

<委員> 前回、2カ月位前に澤口会長、私、道又氏、高橋課長と話し合ったときに出た話は、当初の考えである克彦氏にまるまる1冊を執筆してもらうのは時間的にも労力的にも難しいということであった。

克彦氏からの意見も含め我々で話し合ったのは、河出書房で出している文藝別冊のような本、この手の本は雑誌風を装って書棚に長く置いてもらえるメリットがあり「このスタイルの本をつくっては」ということであった。

没後50年・開館20周年に向けての記念出版とうたい、この企画にのる出版社がないかということで初めにオール讀物（文藝春秋）に私が窓口となり相談してみたところ、商業ベースとしてオール讀物別冊のようなものを作るのは難しいということであった。現在、文藝春秋にある企画出版室という自費出版する所に相談しているが、見積を出してもらったところ予想以上の金額で頭を痛めているのが現状である。その他、全国的に販売をしようとする場合、流通、ISBNコード（以下「コード」）等の課題もある。

しかし、没後50年という節目に全国的、老若男女に野村胡堂を知らしめるチャンスである。若い世代に語り継ぐためには、良い読本を作成しなければならない。

4月までに出版できれば、開館20周年と併せてマスコミを動かせる。

<事務局> 鈴木委員からの説明のとおり、現在構成内容、金額、流通のところを詰めている状況である。没後50年というこの節目に我々の世代が後世に残す財産をつくることとして取り組んでいるものである。

<委員> 「野村胡堂・徳川夢声」、「野村胡堂・辰野隆（ゆたか）」の対談もとても面白い内容である。是非構成に入れるよう検討してほしい。

<会長> 道又氏に伝える。

<委員> 私は野村学芸財団（以下「財団」）の元奨学生であるが、是非「胡堂の生涯」の章のところに財団の経緯・様子等を入れてほしい。

<委員> 財団で会報誌を発行している。それを資料にすればよいと思う。

<委員> 野村胡堂が亡くなったときに井深大が書いた追悼文があるのでそちらも検討してほしい。

- <会 長> 構成が本決まりになるまでまだ時間がある、ご意見等がある場合は記念館へ伝えてほしい。
- <館 長> 何ページ位になる予定なのか。
- <委 員> 今まで出版されたものを例にすると、グラビアなしで190～200頁、グラビアありで200頁以上になる。
- <事務局> 全国的に流通させるためにはコードが必要となる。経費で42万円かかるが、ぜひコードをつけたいと考えている。コードがついている図書であれば、国立国会図書館に50年は収蔵してもらえると聞いている。将来に残していくことを考えれば必要となる。
- <委 員> 部数は、これから検討していくが、見積では2,000部でとっている。それ以上、以下でも金額はそんなにかわらない。価格は、1,200円から1,500円で考えている。
- <会 長> 出版については途中報告となるので、また改めて報告させていただくこととしたい。

開館20周年事業（平成26年度）について

- <会 長> 事務局から説明をお願いします。
- <事務局> 特に資料は用意していない。先ほど皆さんからいろいろとアイデアをいただいた。事務局としては庁内の元記念館担当者を含め、銭形平次、音楽両方の側面を掘り起しながらこれからの記念館について考えていきたい。11月までを目途に案をまとめ、皆様に提示したい。皆様から頂いた意見も参考にしながら、開館20周年記念事業に留まらず、これからの10年について検討していきたい。
- <会 長> 事務局からその他について説明をお願いします。

その他

- 佐藤昭八氏編者『野村胡堂・あらえびす関係記事目録と件名索引 平成25年』
- NPO法人野村胡堂・あらえびす記念館協力会副理事長・八重嶋勲氏著『父の手紙』
- 藤倉理恵子氏（故藤倉四郎氏夫人）編著『野村胡堂からの手紙』をそれぞれ紹介。

閉会（野村館長）